

鹿島灘のメロン



る。昼間に日射で内部の温度を上げ、かつ夜間は熱が外部に逃げるのを妨げるから、露地と異なって、まさに「温室」である。鹿島灘のメロン作りは、自然の恵みと近代的な温室のコラボと思えば納得がいく。さらに鹿島灘を渡る涼しい風も大事な温度管理に役立っているかもしれない。

他方、今や地球は温暖化に直面している。上空の二酸化炭素が、昼夜を問わず、地面から宇宙に逃げる赤外線エネルギーを吸収し、再び地面に放射するという「温室効果」のせいである。当然、二酸化炭素が増えるほど温暖化が進む。最近、鹿島灘にも自然のエネルギーを利用するソーラー発電の展開が目につく。

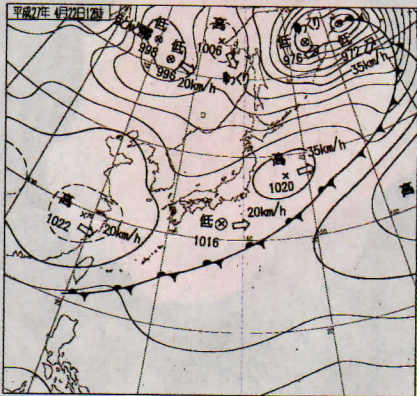
甘いメロンを食しながら、近代技術のありがたさと石油社会がもたらすそれぞれの「温室効果」に思いを馳せた。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)

メロンの出荷が最盛期を迎えようとしている。鹿島灘に面した銚田市や鹿嶋市、茨城町などが一大産地で、露地栽培から始まったメロン作りは半世紀以上の歴史を持つという。火山灰に覆われた水はけの良い土質、適度な寒暖の差、温暖な気候の恩恵だと言われている。気象庁の「アメダス」で銚田の温度を平年値で見ると、メロンが成長する時期(2、3、4月)の最高気温の平均は12.6℃、最低気温は1.5℃、寒暖の差は11.1℃となっている。

考えてみると、現代のメロンは温室栽培であ

相対的な高・低気圧



のでポンプの底部が暖くなるのと同じ理屈だ。5月の穏やかな晴れ間にも、自然のポンプが働いている。

高気圧の定義は「周辺より気圧が高い領域」で、低気圧の定義は逆に低い領域である。1010hPaの高気圧もあれば、それを超えるような低気圧も存在する。両者を区分けする気圧の数値はない。高くても低くても山、深くても浅くても谷と同じである。高気圧と低気圧、あくまでも相対的な関係にあり、大きさもさまざまである。

掲載した天気図を見ると、四国沖に1016hPaの低気圧が、樺太の北西方向には、これより低い1006hPaの高気圧が存在している。自然の摂理は、至るところ高気圧あるいは低気圧とはならず、あたかも夫婦のように高・低気圧がペアになって現われる。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)

初夏、中国大陸から移動性の高気圧がやってくると、空は晴れわたり、暖かで湿度も低い。高気圧圏内では、緑の野を渡り花を揺らす風も弱い。高気圧では地上付近で弱い風が時計回りに吹き出し、それを補うように上空から空気が沈降している。この時、空気が気圧の低い上空から下層に押し込まれて圧縮されるため温度が上がる。当然、湿度も下がり、雲が出来にくい。気象学で「断熱圧縮」の効果と呼ばれる。

その暖かさは、空気ポンプを何度か押し下げてタイヤに空気を入れると、空気が圧縮される